

大原幽学の基礎的考察

大原幽学全書・全集本の検討「奉行所本」を中心

鈴木映里子

Research on OHARA Yugaku Viewed from the "Buggyosho-hon": a Historical Study Based on "Yugaku Zensho" and "Yugaku Zenshu"

はじめに

- ①『幽学全書 完』と『幽学全集』
- ②これまでの研究
- ③所収史料の検討
終わりに

【論文要目】

本稿は原典史料の検討を中心とした史料論的考察である。千葉県東総地域を舞台に活動した農村指導者大原幽学、彼に関する研究はその多くが『幽学全書』『幽学全集』に依拠してなされてきた。しかしながらそのことが要因として事件発生時期の事実誤認や、読み違いがあることも指摘されてきている。

刊行から半世紀を過ぎてなお、幽学研究に大きな影響を及ぼすこの「聖典」を、その収録著作類を点検することで、底本としての「全書」「全集」が刊行されてから抱える問題を僅かでも明らかにすることが本稿の目的である。

これまで俎上に載せられることが稀であった「奉行所本」とよばれる稿本類が再発見された。関東取締出役の手先が、幽学の教導所である改心楼に押し入るという「牛渡村一件」が起つたのが嘉永五年四月、幽学と門人たちが銚子本城村で関東取締出役の吟味をうけた後、上部機関である勘定奉行所に差出になり、幽学が召喚されて出

府したのが嘉永五年十月である。この召喚の際に証拠書類が提出された。判決が下つた安政四年には返却され村に持ち帰られたと思われる。そしてそのうちの数点が特別にまとめて残され現在まで伝わってきたのである。幽学の門人たちをして、もつとも重要な書類と認識された自筆稿本、それが奉行所本である。つまり幽学の核をなす基礎資料ともいえるものである。

『幽学全書』『幽学全集』にも収録されているこれら史料を、奉行所本九冊と現存する遺稿を含め、再度検討し現在の視点でその成り立ちを捉えなおしてみたいと思う。